

# NEWS CAST

February 2009  
No. 96

日本がん疫学研究会

## (財)高松宮妃癌研究基金 第39回 国際シンポジウム 「メタボリック・シンドローム：発がん への関与とその予防」

津金昌一郎

(国立がんセンター がん予防・検診研究センター  
予防研究部)

標記が2008年11月11日～13日の3日間、東京のパレスホテルを会場として開催された。若林敬二(国立がんセンター研究所長)を委員長として、Walter C. Willett(ハーバード大学教授)、門脇孝(東京大学大学院教授)と私が委員として加わり、シンポジウムを組織した。メタボリック・シンドロームという日本においてキャッチーな言葉を用いたが、リスク集積をその特徴とする症候群というとらえ方では、殆ど研究がなされていないので、その構成要素である肥満、糖尿病、高脂血症などとの関連において、疫学・基礎・臨床分野の研究者(海外19名、国内11名)を招いて発表と討論が行われた。疫学・予防分野では、Hans-Olov Adami(カロリンスカ研究所・ハーバード大学)「肥満、糖尿病とがんリスクの疫学研究：スウェーデンにおける研究のまとめ」、Eugenai E. Calle(米国がん協会)「メタボリック症候群、肥満とがんの疫学研究」、Edward Giovannucci(ハーバード大学)「インスリンとインスリン様増殖因子の大腸発がんにおける役割」、Frank B. Hu(ハーバード大学)「アジア人におけるインスリン抵抗性および2型糖尿病への易罹患性」、Rudolf Kaaks(ドイツ国立がん研究所)「体重過剰とがんリスク：疫学と想定される機序」、古野純典(九州大学)「肥満および身体活動と大腸発がん」、井上真奈美(国立がんセンターがん予防・検診研究センター)「アジアにおける肥満度とがんのリスクとの関連」、そして、私「メタボリック症候群関連要因とがん：日本のエビデンス」が、疫学分野について、また、Rachel Ballard-Barbash(米国立がん研究所)「身体活動、体重管理と乳がんリスクとその予後：臨床トライアルのデザイン」、John A. Baron(ダートマス医大)「がん予防トライアル：これまでにかわったこと」、Mark L. Wahlqvist(台湾国家衛生研究所)「メタボリック症候群とがんの予防」、田島和雄(愛知がんセンター)「日本で増加しつつあるがんの予防を目指した肥満防止の試み」が、予防分野において発表を行った(敬称略)。

肥満とがんとの因果関係については、疑う余地のない程、数多くの科学的証拠が蓄積されている。そのメカニズムとして、脂肪組織から放出される女性ホルモ

ンのエストロゲン(子宮体がん、閉経後乳がん)や、インスリン抵抗性により生じる高インスリン血症や遊離型インスリン様増殖因子の持続的増加(結腸がんなど)、胃液の胃-食道逆流(食道腺がん)、全身の低レベルの慢性炎症状態を引き起こすなどによるリスク上昇が考えられている。



世界がん研究基金(WCRF)と米国がん研究財団(AICR)の2007年報告書「食物・栄養・身体活動とがん予防：世界的展望」においては、肥満によって、食道(腺がん)、大腸、腎臓、膵臓、子宮体、乳房(閉経後)の各がんのリスクが“確実”に高くなると判定している。更に、胆嚢は“可能性大”、肝臓は“可能性が示唆される”と判定している。また、内臓脂肪について、大腸がんのリスクを上げることは“確実”、膵臓、乳房(閉経後)、子宮体の各がんのリスクを上げる“可能性大”と判定している。一方では、閉経前の乳がんは、肥満が予防的である“可能性大”、また、肺がんは、やせによりリスクが上がる“可能性が示唆される”とも判定している。

本シンポジウムにおいても、肥満とがんとの関連についての欧米における確固たるエビデンスが紹介され、肥満対策ががん予防において大きなウェイトを占めるだろう欧米社会の状況が示された。しかしながら、欧米で用いられている肥満は、BMIで30以上が一般的に用いられており、そのカテゴリーに少なくない欧米人が属している。これは、日本などアジア諸国とは異なる現状であり、日本、韓国、中国、インドなどアジアのコホート研究からのエビデンスは、BMI30を超す人はかなり例外的であり、肥満との関連は、閉経後の乳がんや男性の大腸がんなどの一部を除いて検出されにくく、肥満対策で予防出来るがんの割合は大きくはないことが予想される。その他、BMIでは正しく表現出来ない内臓脂肪について、waist-to-hip ratioやadiponectin, leptinなどのバイオマーカーを用いてのがんとの関連についてもいくつかの発表があったが、今後、日本でも研究を進めて行くべき課題であろう。

## 第39回高松宮妃癌研究基金 国際シンポジウムで行われている 科学発表・討論以外の国際貢献

武藤倫弘

(第39回高松宮妃癌研究基金国際シンポジウム  
事務局長/国立がんセンター研究所  
がん予防基礎研究プロジェクト)

また、インスリン抵抗性との関連について、糖尿病既往や c-peptide, IGF などのバイオマーカーを用いた疫学研究からのエビデンスが集積されてきており、特に、結腸、肝臓（肝炎ウイルス感染が前提）、膵臓、子宮体部などがんととの関連が繰り返し示されている。これらのがんは、同時に、身体活動度を高めることによりリスクが減少することも知られている。更に、コーヒー飲用によりリスクが減少することが示されているがんでもあることが興味深い。コーヒーの糖尿病予防効果については、かなりのエビデンスが蓄積されている現状を考えると、コーヒーがインスリン抵抗性を改善することにより、がんを予防するメカニズムも想定される。

リスク重積としてのメタボリック・シンドロームとがんとの関連については、データが殆どないのが現状であるが、われわれの研究 (JPHC Study) では、検討したいずれの部位のがんでも、また、がん全体に対しても関連は示されなかった (Inoue M, et al. Eur J Cancer Prev, in press)。

欧米社会においては、肥満、糖尿病、脂質異常症、そして、メタボリック・シンドロームは、心疾患のみならず、がん予防の観点からも極めて重要な保健問題であろう。日本においても、欧米並みにカロリー摂取が増え、身体活動量との間に、アンバランスが生じるようになれば、やがて同様な状況が訪れよう。しかしながら、確かに、BMI25 以上の日本における肥満者の割合の増加傾向は男性においては認められるが、女性においては、高齢者を除けば減少傾向にある。最近 10 年の糖尿病実態調査の有病率を年齢別に見ると、着実に増えているという印象も受けない。また、国民栄養調査成績からは、カロリー摂取量の戦後の増加傾向は、1970 年代でピークとなっており、その後、減少傾向にある。脂肪摂取量の増加傾向が止まり、炭水化物の減少傾向が継続した結果を反映しているようであり、おそらく身体活動量の低下に呼応しているのかと考える。そして、大腸、肝臓、膵臓などのインスリン抵抗性に関連していると思われるがんの年齢調整死亡率は、約 20 年の遅れで、1990 年代にピークとなり、現在は、男女共に減少傾向にあることは興味深い。

欧米社会での肥満のエンデミックの要因として、いわゆるソフト・ドリンクの多飲やポーション・サイズの問題が議論されていた。日本の食文化は、かならずしも欧米のそれに呑みこまれることがなく、小さなポーション・サイズのカロリーの低い食べ物、そして、緑茶など甘くない飲み物で食事をとるという姿を保っている。Willett 教授が、日本の食の現状や肥満者の少なさの要因について、“カルチャー”という言葉は何度も使っていたのが印象的だった。



高松宮妃癌研究基金による国際シンポジウムが、「メタボリックシンドローム:発がんへの関与とその予防」をテーマとして平成20年11月11日から13日の3日間に亘り東京・パレスホテルにて開催されました。故高松宮妃喜久子殿下が愛でられました菊の花が綺麗な時期で、上野松坂屋では菊人形が、日比谷公園では菊の博覧会が開催されていました。講演は海外からの招待演者19名と国内招待演者11名により行われ、招待演者に加え、毎日140名以上に及ぶ討論参加者があり、活発かつ建設的な討論が交わされました。この国際シンポジウムは、1970年に国立がんセンター研究所の初代所長である中原和郎先生が第1回国際シンポジウムの組織委員長を務められてから、時宜を得たテーマで、国内外の著名な先生方が一堂に会してその研究経過を発表しています。その学術面の水準の高さは言うまでもありませんが、このシンポジウムの期間中、基金の献身的なすばらしさに加え、基金のご配慮による、scientific session 以外のすばらしい企画がありますので、それを本稿にてご紹介したいと思います。

会期中、招待演者の先生方は、基本的に朝9時より午後5時頃までシンポジウムに出席していますので観光の時間はほぼありませんが、招待演者の奥様方等には東京及び、鎌倉観光が用意されています。ツアーによる東京観光では、その途中でお茶や着物の試着等の日本文化体験が、鎌倉観光では大仏や神社、仏閣など鎌倉時代の歴史を楽しむことができ、いずれの参加者にも好評のようです。又、基金のご配慮によって、国際シンポジウムの前夜にはウェルカムパーティーが行われています。乾杯、スピーチ等のない気楽な立食パーティーの形を取り、米国やヨーロッパ等より遠路来られた方々をねぎらい、歓迎しています。シンポジウム期間中のランチはビュッフェパーティースタイルで、これも本シンポジウムの特色の一つです。シンポジウム初日には夕食会が用意されています。パレスホテル1階のスイートルームにて開かれますが、初代総料理長 田中徳三郎氏より歴代シェフが守り続けた味を堪能することができます。日本人の招待演者と海外からの招待演者が入り交じり、会話をとても楽しんでいたのが印象的でした。2日目の夜には、公式行事はありませんが、海外からの参加者は、過去にご自身の研究室に留学した日本人等との再会を楽しんだり、夜の東京観光を楽しんだりしていたようです。そして最



終日にはフェアウェルパーティーが企画されています。アドバイザーである杉村隆先生とWalter C.

Willett博士(組織委員)よりスピーチを頂き、高山昭三理事長の乾杯のご発声で会が始まります。最終日には参加者の緊張感もほぐれ、リラックスした雰囲気の中、料理と会話を楽しまれていたようでした。今回は、妃殿下のご学友で癌研究基金の設立に多大な貢献のあった97歳の岩崎藤子理事が参加され、招待演者に総裁寛仁親王殿下からの記念品を贈呈されました。

学術プログラム以外の企画を簡単に述べさせていただきましたが、これらの企画を可能としているのは、招待演者の方々に会場のホテルへ宿泊していただき、より親しく交流をはかれるように配慮されているからです。

さて、国際シンポジウムの最終日には築地への早朝ツアーが企画されています。これは唯一、招待演者も参加できるものなのですが、朝5時にホテルのロビーに集合し、築地市場のマグロの競りを見に行くというやや過酷?なツアーです。2003年よりももう6回も続けられており、第1回築地ツアーでは昨年(2008年)のノーベル医学生理学賞を受賞されたドイツのHarald zur Hausen 博士も夫人と共に参加されています。今回は、Ballard-Barbash博士(米国国立がん研究所)、Cleary先生(ミネソタ大学ホームヘル研究所)、Dombrowski先生(グライフスワルド大学)ご夫妻、Hardie博士(ダンディ大学)、Kaaks博士(ドイツ国立がん研究所)ご夫妻、田島和雄博士(愛知がんセンター研究所)、中釜斉博士(国立がんセンター)が参加しました。田島博士にはツアー当日に発表が控えているにも関わらず参加して頂き、感謝しております。ツアー参加者は、貝塚、海老塚、玉子塚等がある波除神社でガイドさんと合流した後、ガイドさんと一緒に場内へ向かいます。マグロの競りは決められた場所から見るようになりますが、海外からの見学者で溢れ返っていました。高級とされるインド洋産、大間(おおま)産の本マグロ(7千円~1万円/Kg)が大凡の値段の順に並べられ、次々と競り落とされて運び出されて行きました。余談ですが、シンポジウムの終了後に俳優の松方弘樹が山口県で300Kgを超えるクロマグロ(6千円/Kg)を釣り上げて話題となっていました。競りを見た後はマグロの解体を見学します。数人掛かりで刀の様な長い包丁を使い器用にマグロが切られていきます。ここはシャッターチャンスですので、写真を撮りました。その後、生け簀の河豚、烏賊等を見学し、最後に寿司を頂きました。今年は「鮪文」に入りましたが、場内には他にも「大和寿司」など有名なお寿司屋さんがあります。「鮪文」は創業160年の老舗であり、味も格別に美味でした。親方は英語も堪能で色々説明して貰えますが、醤油をつけ過ぎると「味がわからなくなる」とうるさいようですので行かれる人はお気を付けてください。

更にツアーに関して付け加えますと、場内は仕事が

忙しく苛立った市場の人と台車、ターレー(自動3輪車)が錯綜し、混雑いや、混乱した状態にあり、見学者の回りは危険でいっぱいです。しかも、好奇心旺盛な参加者は一カ所に留まったり、ふらりと見に行ったりとガイドさんを泣かせています。しかしながら、ツアーも後半になると戦場を無事帰還したかのごとく参加者の心が通じ合い、団結していました。足下も水びだしで危なっかしいツアーですが、長年続いているのはこの連帯感が何とも言えないからでしょうか?築地市場の豊洲への移転は2014年に予定されていますが、この雑然とした雰囲気が無くなる可能性もあり残念です。

最後に、パレスホテルで行われる国際シンポジウムは、とりあえず今回が最後になります。開業して47年のパレスホテルは国有国営「ホテルデート」跡地に建てられた由緒あるホテルですが、建て直し工事のため3年間休業するそうです。ホテルは皇居に隣接し、眺めも良く、ホテルからジョギングをする方もいたと聞いています。次回の国際シンポジウムは九段下のホテルグランドパレスで行われます。毎年見ているお堀の白鳥夫婦が見られなくなるのは残念ですが、国際シンポジウムの学術以外のすばらしい企画もそのまま継続されるようです。この様に、「海外からの発表者そしてその家族に日本の文化を知ってもらうことも大切である」という故高松宮妃喜久子殿下のお気持ちを基金が可能にしています。



築地ツアーで見ることのできるマグロの解体



マグロの競りを見学しているツアー参加者

## 第67回 日本癌学会学術総会 International Session 'Large-scale Cohort Studies in Asia' に参加して

若井 建志

(名古屋大学大学院医学系研究科  
予防医学/医学推計・判断学)

本International Sessionはシンポジウム形式で行なわれ、海外からはDr. Daehee Kang (Seoul National University)、Dr. A Rahman A Jamal (Universiti Kebangsaan Malaysia)、Dr. Kee Seng Chia (National University of Singapore) がそれぞれ韓国、マレーシア、シンガポールで実施中の分子疫学を意識したコホート研究を紹介した。同時にDr. Kee Seng Chiaの発表では、genome-wide association study (GWAS) が広く行なわれるようになった時代のコホート研究の役割—生活習慣や環境要因を疾病発生前に評価し、優れたコホート内症例対照研究を可能にすること—についても触れられた。日本の大規模コホート研究からは、陶山昭彦先生(放射線影響研究所 長崎研究所)、井上真奈美先生(国立がんセンター がん予防・検診研究センター)と小生が、それぞれ原爆被爆者のコホート研究、厚生労働省研究班による多目的コホート研究、日本多施設共同コホート研究について発表した。

セッションに参加して印象に残った点として、第1に韓国、マレーシア、シンガポールで実施中のコホート研究は、政府が全国で実施している健診の場で研究参加者を募集したり、首相が直接に研究実施を指示するなど、国家プロジェクトとして位置づけられている点が挙げられる。研究者の独立性は保証する必要があるが、人口動態調査死亡票の使用や死亡小票の閲覧申請一つとっても容易ではない日本では、もっと行政の支援があっても良いのではないかと思われた。

第2は、井上先生が日本のがんコホート研究の歴史をまとめておられたが、研究の多くは1990年代前半までに開始されていることである。現状はこれまでの遺産で成果を出している状態といえよう。バブル経済の崩壊以降、日本の社会が大きく変化し、生活習慣や環境要因も変化したと考えられるにもかかわらず、1990年代後半以降に開始された研究はほとんどない。これが単なる偶然であれば良いが、(1) 研究者個人の業績評価が厳しくなり、成果が出るのに長い年月がかかるコホート研究の立ち上げが敬遠されている、(2) 地域や職域のコミュニティが弱くなり研究参加者の募集が困難になった、などの構造的な理由であるとすれば問題であろう。

倫理面での配慮もこれまで以上に求められ、コホート研究の参加者募集の困難さを日々実感しているところであるが、あえて今コホート研究を開始することにも意義があるのではないかと感じた次第である。

## 第67回日本癌学会学術総会 2日目報告

郡山 千早

(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科  
疫学・予防医学)

今年の日本癌学会学術総会は10月28日-30日の3日間に渡り、名古屋国際会議場で開催されましたが、日本癌治療学会が引き続き開かれることもあり、例年とは異なる雰囲気を感じられた参加者も多かったと思います。私は特に2日目の内容についての報告をお引き受けしましたものの、その日は、夕方のポスターセッション以外は疫学とは少々離れたセッションに出席していたので、かなり個人的な興味に偏ったウイルス発がんに関するセッションから抜粋したご報告を含むことを予めご了承頂きたいと存じます。

午前中のHPVのワークショップでは、国立がんセンター研究所の齋藤真子先生がヒト子宮頸がん多段階発がんモデルの解析と題して、HPV16-E6 およびE7の発現条件下ではHras単独でも高い発がん性を維持することを報告されました。さらに午後のウイルス発がんのシンポジウムでは、同研究部の清野透先生がこのin vitroモデルを用いて、子宮頸部以外の細胞(食道、肺など)においても同様の発がん性を確認したことを報告し、様々な臓器におけるHPV発がんメカニズムを検討する際の有用なin vitroモデルとして期待できるのではないかと感じました。「EBV、その他ウイルスと炎症」のワークショップでは、北海道大学の岩切大先生が胃上皮細胞において、Toll-like receptor3を介したEBERの新たな発がん機構を、札幌医科大学の山本博幸先生はJCウイルスT抗原陽性胃がんにおいて、複数のジェネティックおよびエピジェネティックな異常が認められることを報告されました。特に胃がんとJCウイルスについては、昨年の本学会誌であるCancer Scienceにも国内の別の研究グループから報告がありますが、JCウイルスT抗原の高い陽性率(49%)にも会場の関心が集まり、多くの質問が寄せられていました。JCウイルスはパポウイルス属ポリオーマウイルス科に属し、動物実験における発がん性から、ヒトでの研究も多くなされていたようですが、明確な因果関係が明らかにされないままでした。今年は新種のポリオーマウイルスとMerkel cell carcinomaとの関連がScienceに報告されるなど、ポリオーマウイルスとヒトがんとの関連が見直されつつあります。すでに大腸がんや食道がんにおいてもJCウイルスが検出されるという報告もあり、今後の展開に注目したいと思います。

疫学のポスターセッションでは、近年の傾向ではありますが、遺伝子多型に関する発表が多く、3つのセッションで今年も新しい遺伝子多型に関する結果が報告されていました。個人的には大変勉強になります



が、この分野は動きが速く、1年に1回程度の知識のアップデートではもはやついていけない感があります。まだ今のところは、1つあるいは数個の遺伝子の多型と発がんリスクとの評価に関するものが多いのですが、主要ながんでは多くの遺伝子多型が調べられていることと思います。そろそろ、(これまでにわかっている)遺伝子多型全体を見渡すとどうなのか?ということを知りたいと思っているところ、新井富生先生が39種の遺伝子多型と悪性腫瘍数に関する報告をされていました。自分の発表とも重なり、詳しい内容はお聞きできなかったのですが、今後、このような発表も増えてくるのではないかと思います。

「ライフスタイル/生体指標」のセッションでは、血液以外の生体試料を用いたバイオマーカーなど5つの発表がありました。中でも溝上哲也先生は、血清フェリチンと尿中8-OHdGとの関連を示し、血清フェリチンの高い状態が酸化DNA損傷の原因となっている可能性を報告されました。高フェリチンと発がんリスクや酸化DNA損傷との関連は以前より指摘されているものの、このような方法による評価は、これまであまりなかったのではないかと思います。鈴木勇史先生の体格と甲状腺がんのリスクに関する検討では、現在の体格同様に20歳前後の時の体格もリスクとなることを報告されました。着眼点が非常にユニークで、これまでに放射線被ばくと良性腺腫以外に大きなリスク要因が明らかとなっていない甲状腺がんの発がんメカニズムを理解する上で、新たな知見を与えたと思います。

以上、何ともまとまりのない報告というより散文になってしまいましたが、与えられた文字数をすでに超えてしまいましたので、この辺で締めくくりたいと思います。

## 第67回日本癌学会に参加して

溝田 友里

(国立がんセンターがん対策情報センター  
がん情報・統計部)

2008年10月28日～11月1日に、名古屋国際会議場で行われた第67回日本癌学会学術総会、第46回日本癌治療学会総会に参加しました。今年は両学会の共催で行われたため、大規模で活気のある学会という印象でした。モーニングレクチャーやシンポジウム、口演、ポスターなど、どの会場も朝から夜まで盛況で、活発な議論が行われていました。

癌治療学会の2日目には、ポスター『乳腺 支持療法』で「生活習慣や支持療法などが乳がん患者の予後に与える影響を調べる多目的コホート研究」の研究デザインと進捗に関する発表を行いました。この研究は、国立がんセンターの山本精一郎先生が研究代表者をされているもので、私は山本先生のご指導の下で研究計画書や質問

票の作成など事務局作業をさせていただいています。研究の目的は、①食事や運動などの生活習慣や、②代替療法の利用、③ストレスやサポートの授受、HOPE、生きがい、乳がんになったことによる perceived positive change (成長感や得たもの)などの心理社会的要因、④リンパ浮腫などの術後慢性痛と緩和ケアなどが、乳がん患者さんのQOLや予後に与える影響を調べることです。乳がんの治療効果を検討する数百～数千人規模の複数の他施設共同臨床試験の共同研究としてこの大規模コホート研究を実施し、1万人の乳がん患者さんの登録を目指しています。また、臨床試験とは独立して、日常診療におけるコホート研究として、国立がんセンター中央病院でも、血液、組織など試料の採取も含めた乳がん患者さんのコホート研究をこの春開始する予定です。ポスター発表には臨床の先生のほか、疫学の先生方も見に来てくださり、乳がん患者さんの予後と生活習慣との関連のレビューや、本研究で用いる質問票の内容に興味を示していただきました。また、参考になるコメントもいただき、とても勉強になりました。

まだまだ患者さんの登録が始まったばかりですが、将来、乳がん患者さんに有用な情報を提供することができるよう、研究を進めていきたいと改めて思いました。

## 若手研究者 紹介

伊藤ゆり

(大阪府立成人病センター 調査部)



このような機会をいただき、感謝申し上げます。私は大阪大学医学部保健学科を卒業後、同大学院医学系研究科保健学専攻の数理保健学教室にて大野ゆう子教授の御指導のもと、地域がん登録データに基づく研究に携わってまいりました。修士課程の頃より、大阪府立



成人病センターの大島 明先生をはじめ、多くの地域がん登録の先生方からの御指導を賜りました。博士課程在籍中には、ロンドン大学衛生学・熱帯医学校の Michel P Coleman 教授 (がん生存率国際協同調査 CONCORD の主任研究者) のがん生存解析グループに短期留学の機会をいただき、地域がん登録データによる生存解析の最新の方法について学ぶことができました。現在も Coleman 教授をはじめ、ロンドン大学がん生存解析グループの研究者の方々と共同研究をさせていただいております。現在は大阪府立成人病センター調査部にて津熊秀明先生の御指導の下、がん研究振興財団のリサーチ・レジデントとして地域がん登録データに基づく研究に取り組んでおります。

大学院修士課程在籍中には長崎県がん登録データに、最新の情報を反映した生存率推計方法である

period analysis を適用し、その有用性を紹介しました (文献 1)。長期生存率を提供する際に、従来法では何年も前に罹患した患者集団のデータに基づき計算するため、outdate な値となっていました。この新しい方法では、最新の部分のデータに基づき計算するため、より現実に近い値を報告することができます。残念ながら、これまでのわが国の outdate な予後調査手順では膨大な作業を伴い、この方法を容易に適用することができませんが、一部の県では住民基本台帳ネットワークの活用による予後調査の効率化が試みられており、わが国でも最新の生存率推計が可能となるよう、効率の良い予後調査システムの確立が望まれます。

博士課程在籍中には大阪府がん登録データに基づき、診断時の年齢および進行度分布の変化が生存率のトレンドに与える影響についての研究を行いました。特に胃がんでは5年生存率が向上しているものの、進行度分布の違いを調整すると生存率の向上は80年代後半から頭打ちになっていることがわかり、胃がんにおける生存率の向上は早期診断による寄与が大きいことがわかりました (文献 2)。がん対策の目標はがんによる死亡率の減少が最終目標ですが、罹患率、生存率の動向も同時に検討しつつ、一次予防、二次予防の普及がどのように各種がん統計値のトレンドに反映されているかをモニタリングし、がん対策にフィードバックしていく必要性を感じています。

現在は大阪府におけるがんの現状を把握し、がん対策に活かすためのデータ解析を中心に研究をしています。これまでの私は新しい方法論への興味・関心を中心でしたが、大阪府立成人病センターに来てからは、周りの先生方からのご指導により、がん対策に活かすための研究の重要性を実感するようになりました。長年にわたり積み重ねられた大変貴重な地域がん登録データを活用することでがん患者さんやそのご家族、臨床現場の方に役立てていただけるような成果を報告し、国民の皆様からの地域がん登録の重要性へのご理解をいただけるように、今後も研究を続けて行きたいと思えます。まだまだ勉強不足の未熟者で、周囲の先生方にはご迷惑をおかけするばかりですが、今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願ひ申し上げます。

文献

1. 伊藤ゆり, 大野ゆう子, 早田みどり, 大島 明. 最新データを反映する period 法によるがん患者の生存率推計 長崎県がん登録女性肺がんを例として. 癌の臨床 2006;52:97-102.
2. Ito Y, Ohno Y, Rachet B, Coleman MP, Tsukuma H, Oshima A. Cancer survival trends in Osaka, Japan: the influence of age and stage at diagnosis. Jpn J Clin Oncol 2007;37:452-8.

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

がん予防大会 2009 愛知のご案内

開催名 (3学会合同)	がん予防大会 2009 愛知
学会長	第16回日本がん予防学会 会長 白井智之 第32回日本がん疫学研究会 会長 田島和雄 第10回日本がん分子疫学研究会 会長 菊地正悟
主課題	予防の容易ながん困難ながん
会期	2009年6月16日(火)~6月17日(水)
会場	愛知県がんセンター 国際医学交流センター (〒464-8681 名古屋市千種区 鹿子殿 1-1)
学術事務局	〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町川澄 1 名古屋市立大学大学院医学研究科 実験病態病理学内 TEL(052)853-8155 FAX(052)842-0817 yobo2009@med.nagoya-cu.ac.jp
*プログラムにつきましては、下記の日本がん分子疫学研究会のHPをご覧ください <a href="http://www.aichi-med-u.ac.jp/jame/index.html">http://www.aichi-med-u.ac.jp/jame/index.html</a>	

★ 編集後記 ★

NEWSCAST 96号をお届けします。発行が随分遅くなり、申し訳ありません。「二月は逃げて走る」とはよく言ったものと感じ入りましたが、反省しております。さて今号では、昨年秋に開催された高松宮妃癌研究基金国際シンポジウムと日本癌学会学術総会より、話題を提供いただきました。ご寄稿下さった先生方、有意義な情報とともに示唆に富むコメントをありがとうございました。また、今回、若手研究者として伊藤ゆり先生をご紹介します(永田)。

今回で編集を担当してから3回目のニュースキャスト発行となりました。とは言え、1年目は編集のほとんどを2年目の永田先生に頼っている状況で、若葉マーク状態をそろそろ改めなければならないと自覚しています。ところで、前回号に同封いたしました本研究会と日本がん分子疫学研究会との合併に関する調査は、回答をお寄せいただいた方が数名しかおられませんでした。次号以後にこの問題に関する記事を取り上げたいと思っています。活発なご意見をお願いいたします(田中英夫)

